

かさまのれきし

第58回



大石邸跡

かさま歴史交流館井筒屋の近くに、大石邸の跡があります。ここは、赤穂藩浅野氏の国家老で「忠臣蔵」で知られる大石内蔵助良雄の曾祖父良勝と祖父良欽が住んでいた屋敷跡です。なぜ大石氏がこの地に住むようになったのかを紹介します。

まず、大石氏の主君であった浅野氏についてお話しします。浅野氏の始祖・浅野長政

と豊臣秀吉の両妻は姉妹で、義兄弟の関係から、長政は豊臣政権を支えました。秀吉の没後、長政は石田三成と対立し、慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の戦いでは徳川軍に参加しました。江戸幕府が開かれ、長政は家康から真壁五万石を隠居領として賜りました。長政の没後、三男長重（浅野氏分家の初代）が相続し、大坂の陣の戦功により、元和八年（一六二三）、笠間五万三千五百石の藩主となりました。

浅野氏が笠間に移ると、武家屋敷が不足し、本丸の藩の館は狭く、家臣たちが登城する山城は城下町から遠いなどの問題がありました。浅野氏二代の長直（笠間藩の時は「長綱」と称す）は、寛永二十年（一六四〇）頃、城下町に近い佐白山西端の台地にあつた玄勝院管理の白山神社を移転させ、館を建てました。敷地を「下屋敷」と呼び、建物を「御殿」と称しました。その御殿の概要は明らかであ

りませんが、旅人は「新城」と見たようで、たいそう立派な御殿であったと推測されます。笠間藩では山城の出城として建設したため幕府の許可を得ませんでしたが、新城を建てたとの誤解を消すために、一夜にして白壁の塀を壊し垣根にしました。この時に「下屋敷の逆さ杭」の伝説が生まれました（『笠間の民話』上巻）。

藩庁ができると家臣の屋敷地を決めました。御殿に近い田町と入山居（現桂町）を上級家臣の屋敷にしました。ここで筆頭家老の大石家は、御殿に最も近く、城下町の事情もよく分かるこの屋敷を与えられたのでしょう。しかし、浅野氏は正保二年（一六四五）に赤穂藩に移封となり、大石氏がこの屋敷にいたのは、四、五年の間であったと思います。その後の代々の笠間藩主もこの地を家老級の家屋敷にしました。

現在、邸内には、山麓公園から移築された大石良雄の銅像が雄々しい姿で四十六人を指揮しています。ここには、案内板や「浅野氏・大石氏と笠間市」の詳しい説明板が建てられています。井筒屋へお越しの折には、ぜひ大石邸跡にもお寄りいただき、城下町の景観と合わせて探訪されますようお勧めします。

（市史研究員

小室昭）